

8月25日（月）今日はサラドゥ小屋からローランの裂け目を越えてスペインに入る。

朝一番、吹き飛ばされそうな強風のなかで急坂を登る、頑張ろう！！



♪♪ ピレネーの山の男よ いつも一人何を想う ♪



ローランの裂け目の向こうはスペインだ



最後は岸壁をよじ登る

ついに国境を越えた、これがスペインだ。しかしピレネー山脈ではフランスもスペインもない。あくまでもピレネーなのだ。明日はオルデサ溪谷の下側を左から右へ歩く。



スペイン側のローランの裂け目を見上げる場所で、恒例のエーデルワイスの合唱だ。赤沼さんの指揮もまんざらではない。小林さん、筆者・浅野に次ぐ第3の指揮者誕生だ。ただ、左手の手袋が気になるのだが、「弘法も筆の誤り」かな。



♪♪ Edelweiss, edelweiss, every morning you greet me.
Small and white, clean and bright, you look happy to meet me.
Blossom of snow, may you bloom and grow, bloom and grow forever.
Edelweiss, edelweiss, bless my homeland forever. ♪

オルデサ溪谷の上部に建つゴリッツ小屋を目指してひたすら進む



ここでロック・クライミングの特別講座を開催する。



ピエール師範



大野師範代



井口訓練生（川端さん撮影）
万有引力の法則が足をひっぱる



左：岩場下りの実践講座
下：あられちゃん現わる



ゴリッツ小屋での夕食前の団らん（ワインで乾杯）



ピレネーの国境越えを無事成し遂げ、安堵の色を浮かべるメンバー一同。この家族的雰囲気
がなんともいえない。明日はオルデサ溪谷を下るだけ、明後日以降は観光のみ。

ゴリッツ小屋 Refugio de Goriz（スペイン語）泊

8月26日（火）ゴリッツ小屋からオルデサ溪谷を下り、トルラへ向かう。

下：ゴリッツ小屋
右：オルデサ溪谷
谷の下まで降りる



ピレネーの山の女よ
いつも一人何を想う



オルデサ溪谷の登山口 Pradera de Ordesa で生ビールを飲む。もう歩かないのだから、痛風によくなかろうと飲むのだ。シャトルバスでトルラ Torla のエーデルワイスホテルへ。

窓から顔を出す同室の横塚さん



ピエールとの思い出を写真で偲ぼう。上段：松井姉妹 下左：赤羽さん 下右：田中さん



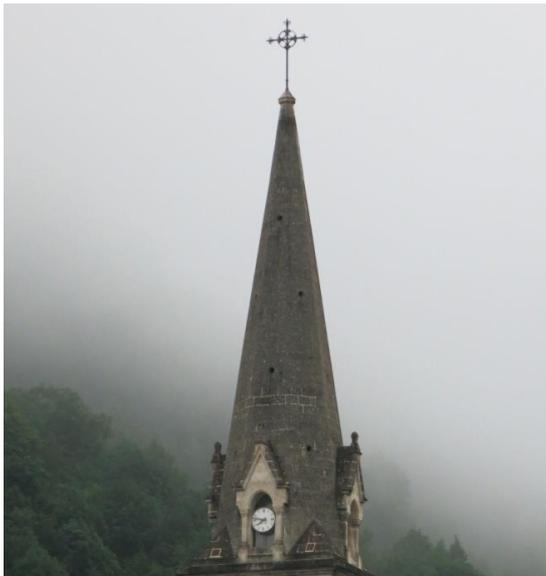
上段2枚と
下右は川端
さん撮影

トルラの町を散策する



今日は時間がたっぷりあるから、来し方を振り返ってみよう。今回の旅では、巡礼街道の雰囲気、世界遺産、ワインと食事、国境越えというテーマがあったが、筆者にはもう一つテーマがあったのだ。前述した「太陽と十字架（原題：ピレネー山脈）」で、著者のアンリ・ルフェーブルは、南仏西部に見られる車輪型の円板がついた十字架を「太陽の十字架」と呼び、このシンボルの解釈作業を通じてピレネーの文化の特徴を明らかにしようとした。

社会学、哲学の分野であり、筆者の理解が及ぶ範囲をはるかに超えているが、今回はこの「車輪型の円板がついた十字架」を探してみようと思いついた。旅の途上で、それに該当するのではないと思われる十字架を2つ見つけた。ルフェーブルは南フランス人がその物質的な乏しさにもかかわらず、生活を楽しむ術を知っていると結論づけた。（例：ワイン）



トルラの Edelweiss Hotel 泊